

<抄録>31. 外傷による多数歯欠損および不正咬合に対し包括的歯科治療を行った症例：矯正歯科, 口腔外科および補綴科によるチームアプローチ

著者名(日)	横山 一徳, 有末 眞, 石島 勉
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	21
号	1
ページ	192
発行年	2002-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008736/

改善法は歯科保存学領域では歯面研磨、漂白、ラミネートベニア修復などが適応されるが、歯質の削除無しに審美回復を行うことのできる漂白法が注目されている。特に最近では、生活歯における漂白法について新しい適応方式の薬剤も開発され、多く行われている。本講座においても、漂白法については継続的に検討し、臨床応用、報告を行っている。今回は近年、開発された可視光線照射型漂白剤、松風ハイライトおよびWelchAllyn Kreativパウダージェルを使用した生活歯Office Bleachingについてその臨床成績を報告する。

（症例1）21歳女性。前歯部の審美不良を主訴に来院した。小児期に抗菌薬長期投与の既往あり。Feinmanの分類第2度と診断した。ラバーダム防湿下にて松風ハイライトとプラズマライトを用いて漂白処置を行った。5回の処置により、シェードがC3からA2に改善された。

（症例2）20歳女性。上顎右側側切歯と犬歯の審美不良

を主訴に来院した。エナメル質表層の歯質の黄変と診断し、ガン・ダムにて歯肉保護を行い、WelchAllyn Kreativパウダージェルとプラズマライトを用いて、同部の漂白を行った。2回の処置により、色調の改善が認められほぼ中切歯と同様の色調まで回復した。

（症例3）15歳女性。前歯部の審美不良を主訴に来院した。2歳時に肺炎に罹患し抗菌薬長期投与の既往あり。Feinmanの分類第2度と診断した。ガン・ダムにて歯肉保護を行い、WelchAllyn Kreativパウダージェルとプラズマライトを用いて、前歯部の漂白を行った。4回の処置により、シェードがC3からB3に改善された。

以上の結果より、これらの漂白剤は歯の黄変のみならず、これまでは漂白処置では回復困難とされていた、テトラサイクリン着色歯にも漂白効果が強く作用することが明らかとなった。

31. 外傷による多数歯欠損および不正咬合に対し包括的歯科治療を行った症例 —矯正歯科、口腔外科および補綴科によるチームアプローチ—

○横山 一徳, 有末 眞*, 石島 勉**

(よこやま矯正歯科・*北海道医療大学歯学部口腔外科学第2講座・

**北海道医療大学歯学部歯科補綴学第1講座)

【目的】外傷に対する矯正歯科の役割は主に、顎骨骨折および脱臼歯の整復固定である。しかし、大きな顎骨の損傷や多数の歯牙喪失がある場合には、緊急性の必要性から正確な顎間関係や歯列の回復は困難となる。今回、交通事故により複数の顔面骨骨折および多数歯の喪失を生じ、救命処置後、整復固定および歯科処置等を受けるも治療結果に満足できず来院し、口腔外科、補綴科とのチームアプローチによって審美的および機能的な改善が得られた症例を報告する。

【症例】初診の1年前に交通事故により全身を受傷した23歳の女性で、口腔領域では、顔面裂傷、上下顎と鼻骨の骨折、421|12脱落、3|歯槽骨内圧入を認めた。上顎骨は複雑骨折のため整復されず、下顎骨は正中と左側大臼歯部で観血的に整復固定された。また、歯肉口唇粘膜の植皮術や上顎義歯などの歯科処置を受けた。退院後、会話時に上顎前歯の露出がないという審美的な主訴で来院した。精密検査より、「外傷に起因した右側TMD、421|12の欠損、上顎の後退と下顎の前方位、顔面非対称を有するskeletal ClassIII long faceの成人女性症例」

と診断した。審美性に関わる主訴を回復するためには骨格系の再構築が必要と判断し、包括的な治療が必要なことから矯正歯科、口腔外科、および補綴科の3科からなる合同カンファレンスにより治療計画を立案し、以下の手順で治療を行った。1) 上顎前歯の位置付け、TMDと機能的誘導の解消のために咬合挙上板を付与した仮義歯を装着した上で、マルチブラケット装置による術前矯正治療を行う。2) 顔面非対称と下顎の前方位を改善するための下顎枝矢状分割術を行う。3) 上顎右側臼歯部を下方に移動させて咬合させるために上顎歯槽部骨切り術を行う。4) 術後矯正治療および保定後、欠損部の最終補綴を行う。

【結果および考察】下顎の突出感および顔面非対称は改善され、咬合も安定している。上顎前歯の審美性に対しても患者は十分満足しており、良好な状態を維持している。外傷に起因する多数歯欠損、顎間関係や歯列の不正、顎機能異常、審美障害といった問題を解決するには、チームアプローチによる包括的歯科治療が不可欠であり今後さらにその重要性が高まると考えられる。